の励ましがあつたればこそ生きて帰れたと思います。

家族も皆無事で留守を守ってくれ、感謝の外はございません。昭和二十五年より農業。

ソ連抑留者として一時は注視されたが、不屈の精神力で社会の一員として注目されるようになり、農業も規模拡大して現在に至りました。毎日老人クラブ活動。当地の銘木、天然記念物の三春滝桜の保存会員として、滝桜の手入れ、接木による育苗等、充実した毎日をごしております。

運命の糸

石川県 高松正朋

人間はいつ、どこで、どんなかたちで死ぬか——それはすべて運命の糸に操られているといつてよい。

昭和二十年五月、満州建国大学前期三年に在学中だった私は、勤労働員で奉天の造兵廠で手榴弾作りに汗を流していた。既に戦局は敗色濃厚となっていたが、先

輩は次々と入隊していった。そのころ、私は海軍にあがれていたが、海軍予備学生の試験よりも早く、関東軍から「輜重兵として綏陽の部隊に入隊せよ」という命令書がきてしまった。

輜重輸卒かと落胆していたら、三日後にまた赤紙がきた。先の入営命令を変更して「工兵として吉林の機動第二連隊に入隊」となっている。軍ではどのようにして兵科や部隊を決めていたのか知らないが、一枚の赤紙が当時の若者の運命の糸となったのである。

もし海軍に入っていたら、恐らく南溟なんめいの藻屑と消えていたであろう。後で聞いた話であるが、綏陽の輜重兵部隊は国境で全滅したとのこと……私は工兵の糸をつかんでまず第一の関門を通過することができた。

東満国境老黒山で陣地構築をしていた私たちの部隊も、八月九日不法侵攻してきたソ連軍と戦うことになった。しかし、旧式の三八式歩兵銃ではソ連軍の自動小銃に太刀打ちできず、多くの戦友が戦死した。

敵は我方の機関銃に集中攻撃をかけてくるので、機関銃手は次々と斃れてゆく。工兵の私は機関銃を手

にすることはなく、ここでも死の糸から逃れることができたのである。

敗戦——武装解除——シベリア抑留となったが、シベリア行きの前夜、最も頼りにしていたT伍長から「貨車の床板を切り破って逃げるぞ、食糧は山に隠してある……」と言われ、私たち初年兵三人は一か八かの運命をT伍長に託して行動を共にすることとした。

ところが人員の区切りで、私だけが別の貨車に乗せられてしまった。途中で銃声が聞こえたが、貨車の中から外の様子は分ならず、T伍長らは逃げお世話のか、撃れたのか、いまだにその消息は分からない。

シベリアへ輸送される途中、不覚にも道端の溜り水を飲んだ私ほか二十人が赤痢になった。治療のすべもなく、仲間は相次いで死んでいく。私も死を覚悟し、背のうに残っていた一つかみの米で、この世の最期の食事と思って重湯を作って食べた。重湯がこれほどおいしいものか……三回ほどで米はなくなったが、不思議なことに血便は止まり、私だけが死の糸を断ち切ることができたのである。

赤痢は治ったが、衰弱した体が鉄道建設の重労働に耐えられるわけがなく、最初に入ったムリー地区から逆戻りで、掖河の旧四一四部隊が変貌した病人収容所に収容された。

ここには無数の死の糸がぶら下がっており、毎朝何人かが静かに死んでいった。私は炊事場のごみ捨て場から拾ってきた野菜の屑でスープを作って食べ、どうにか生の糸につかまり春を迎えることができた。

「日本にダモイ」と言われ、喜んで乗った貨車の行き先はまたシベリアであった。

集団農場、製材所、伐採など作業も収容所も転々と変わったが、三年半の抑留生活は飢えとの闘いであった。その間、何度か死の糸にからまれたが、死んでたまるかという意地と信念を持って懸命に努力すれば、必ず生きる道が開けてくるということを見出すことができた。